

■ 建築の社会的役割

～東日本大震災を経験して思うこと～

北海道大学大学院工学院建築都市空間デザイン専攻修士1年 大友 啓徳

建築は衣食住の一つ。人間が活動を営むためのシェルターであり、自然界のさまざまな営みの中で、長期にわたり健全に存在しつづけることを前提として造られる。また、多くの人々の社会活動の拠点でもあるため、様々な人々に利用され、世代を超えて存続するものである。こうした過程を経て、建築は人々に親しまれ慈しまれる街並みを形成し、都市をつくりだす。さらに、多くの人的、物的資源が投入され、人々に生活と仕事の基盤を長期間提供し、そのための空間を形成する建築は、個人の財産であると同時に社会の共通財産という社会性をもつ。こうした人間にとってなくてはならないもの、社会的にも重要な役割をもつ建築。その中でも建物を安全に使用できるようにする構造設計者になりたく、私は建築の世界に飛び込んだ。そんな中、多くの事を考えられる出来事があった。

2011年3月11日の東日本大震災である。この大震災では、広範囲にわたり大きな揺れがあっただけでなく、東日本太平洋側には史上最大級の津波が襲い、多くの尊い命が奪われた。私自身も地震発生時に茨城県日立市におり、家族こそ無事だったが、地震や津波が実家や近隣の家を襲い甚大な被害を受けた災害だった。

この大災害に遭遇し改めて考えさせられたことがある。それは建築の社会性である。以前から感じていたが、建築という業界内では「当たり前」のことは、建築業界以外では全く「当たり前ではない」ということを身をもって感じた。私たち建築に関わるものにとって「良い」と思うもの、評価が高いものが、必ずしも一般の人にとっても「良い」とは限らない。建築文化的に価値の高いものが保存されるとは限らず、特に注目もされなかった建築が保存されることもある。構造的に安全と言われたが、地震によって家が損傷したのはどうしてなのか。建築関係者は今まで多くの場面で「建築業界内だけに通用する価値」だけを語り過ぎた。その結果として、多くの一般の人たちと溝ができ、誤解が生まれてしまったという問題がある。つまり、建築の社会性に対する配慮が不十分であるため、現代社会ではさまざまな問題をかかえてしまったのだと感じる。

建物は大地震に遭遇した場合、人命を守ることでなっているが、財産保護に関しては定められていない。このことが一般の人たちとの理解に大きな差がある一つの問題点だ。実際に被害にあった一般の人たちの話を聞くと、どうして耐震建物なのに被害を受けたのかと疑問に感じている人が多かった。このことは建築業界内では常識だと思っていることが、一般の人にとっては非常識だということである。

ここで私が言いたいのは「建築業界の価値が間違っている」ということではなく「建築業界以外の価値」がたくさんあって、様々な考え、意見に常に目を向けるべきではないかということだ。この単純な事が、今までの建築業界では行われていなかったのではないかと思う。私は建築を学び始めたばかりの学生だが、だからこそ、一般の人に近い考えを持っていると思うところがある。この意識は今後も常に持ち続けなければならないことだと思う。

さらにもう一点、災害後に深く考えさせられたことがある。それは科学技術に対する過信だ。かつて発生した大地震であるチリ地震(1960)、十勝沖地震(1968)、宮城県沖地震(1978)、兵庫県南部地震(1995)などの災害を受け、耐震技術や防波堤などの技術強化はしてきたが、その結果として人々は技術に頼りすぎるようになってしまった。私の地元では、度重なる津波の被害から街を守るために新たな防波堤を建設した。今回の地震でも防波堤が津波から街を守ってくれると過信してしまい避難しなかった人たちがいたようだが、大きな間違いであった。津波は新しく建設した防波堤を越え街を襲った。しかし、これは設計者が科学技術に全面的にたよった為に起きた出来事だと思う。防波堤を建設する際に、発生する津波の高さなら安全だと説明したからだ。これは、建築業界だけの問題ではないが、科学技術の進歩に過信しすぎることは大変危険であると身をもって感じさせられた。

私は建築の世界に足を踏み入れたばかりだ。何が正しく何が間違っているのか、はっきり言ってまだわからないが、常に社会の変化に合わせて柔軟に対応できるような心構えでいたい。また、構造設計者を志す者として、常に構造設計者は人命や財産を預かっている仕事だと自覚し、誇りと責任をもち、建築に今後も関わっていきたいと思う。